

2013年 京都キリスト召団集会だより (抜粋) 目次

2013年1月6日	「神・キリスト讃美の生涯(続)」
2013年1月13日	「背信、高慢に対する警告」
2013年1月27日	「イスラエル、ユダに対する神の愛惜の嘆き」
2013年2月3日	「インマヌエル、神我らと共に」
2013年2月10日	「それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり」
2013年2月17日	「この火すでに燃えたらんには我また何をか望まん」
2013年2月24日	「今日も明日も次の日も我は進み往くべし」
2013年3月3日	「己が身を献げる」
2013年3月10日	「肉の念い、霊の念い」
2013年3月17日	「汝を我が栄光のために創造せり」
2013年3月31日	「甦りの生命を賜ったキリスト」
2013年4月7日	「為ん方尽くれども希望を失わず」
2013年4月21日	「祈り入る」
2013年4月28日	「報い」
2013年5月5日	「あなたも、あなたの家族も救われる!」
2013年5月12日	「聖霊のキリストの御業」
2013年5月26日	「人に従うよりは神に従う」
2013年6月9日	「わが歩むべき道に導きたまえ」
2013年6月15日	「京都キリスト召団の使命と課題」
2013年6月23日	「ステパノの殉教とピリポの伝道」
2013年6月30日	「パウロの回心と献身」
2013年7月7日	「ルダ、ヨッパ、カイザリアでのペテロの働き」
2013年7月14日	「ヘロデの迫害とペテロの救出」、「アンテオケ教会のパウロとバルナバ」、「パウロとバルナバの第1次伝道旅行」
2013年8月4日	「パウロの第2次伝道旅行」
2013年9月15日	「愛は律法を全うするもの」
2013年9月22日	「パウロの第3次伝道」
2013年9月29日	「エルサレムでのパウロの受難と福音の弁明」
2013年10月6日	「カイザリヤでのパウロ」
2013年10月27日	「ローマへの航海途上でのパウロ」
2013年11月3日	「見ずして信する者は幸いなり」
2013年11月10日	「われ、福音を恥とせず」
2013年11月17日	「神には偏り視給うことなし」(ロマ書第2回)
2013年11月24日	「別の路」
2013年12月1日	「律法による義、信仰による義」
2013年12月15日	「アブラハムの信仰」



神・キリスト讃美の生涯 (続)

2013年1月6日

聖書朗読 詩篇103編

新年おめでとうございます。新年集会は、寒いながらも多くの兄弟姉妹の集まりのもとに開催されました。

奥田先生は、詩篇103編を始めとし、福音書の中の賛美の箇所をたくさん引用されながら、我々の人生の究極の目標が、神・キリスト賛美にあることを明解に語られました。

人は、何故神を賛美するのでしょうか。この世で良いことがあった、恵まれたことがあったから賛美するのでしょうか。良いことがなかったら、賛美しないのでしょうか。賛美がそのような打算に基づく対価関係にたつものなら、真の賛美ではありません。

確かに、恵みもないのに賛美することは、人には難しいことです。しかし、我々は、神様からキリストという根底的な恵みをいただいているからこそ賛美するのです。根底的な恵みとは、キリストによって、人生が闇から光に、マイナスからプラスに、絶望から希望へと変えられたことです。そのことに気づき有り難いと思うと、必然的に全存在をもつて神様を賛美することができるようになります。そして、

「主様、私の生涯を導いてください！」

とキリストに全存在を捧げて歩むと、日常生活で何が起きようと問題にしない、絶対大丈夫の世界に導かれてゆきます。

引用箇所…ルカ1・46、64。2・8〜20、25〜36、17・11〜19。18・35〜43。

詩篇9・1〜2。33。34。36。40。46。57・7〜11。65。66。84。96。98。103の各編



背信、高慢に対する警告

——イザヤ書（第1回） 1、2章——

2013年1月13日

聖書朗読 イザヤ書1章1〜20節

冬らしい寒さが続いている。田畑の土や雑木林の木々は、寒さをこらえて春の準備を始めていることだろう。いよいよ正月モードから春準備モードにギアチェンジしたい。

京都集会では今日から新しくイザヤ書の講筵が始まった。これまで何回かイザヤ書を取り上げていただき、大事な箇所を学んだことがある。その意味でイザヤ書は、詩篇とともに旧約聖書の中では比較的馴染^{なじ}んで来たように思う。しかし、昨年9月以降のエレミヤ書への取り組みにあたり、奥田先生は、これに真正面からぶつかってその中に分け入り、現代の私達に対する主のメッセージを届けてくださった。聖書辞典からコピーした資料を読み込み、注解書の解説を聴きながらの学びは決して平坦なものではなかったが、このような「旧約聖書の深読み」は、初めて経験することだったように思う。したがって私は今回、イザヤ書を学ぶに当たり、講筵を聴く私達も、自ら自宅でイザヤ書の御言葉を拾い解説書を読むなどして、少しでもイザヤの預言に肉薄することの大事さを考える。

本日のイザヤ書第1回の講筵は、イザヤ書成立の時代背景の他、1章から2章までを学んだ。最初から審判と警告の言葉が発せられている。以下に印象に残った御言葉を拾う。

「天よ、聞け、地よ、耳を傾けよ。……なんじら己を洗い、己を清くし、わが

眼前よりその悪業をさり、悪を行うことを止め、善を行うことをならい、公

平を求め、虐げらるる者を助け、孤児^{みなしご}に公平を行い、寡婦^{やもめ}の訴えをあげつらえ。」

「この日には、目をあげて高ぶるもの卑^{ひく}くせられ、驕^{おご}る人かがめられ、唯エホバのみ高くあげられ給わん。」（イザヤ書1章及び2章から抜粋）

イザヤ書の御言葉は雄大で力強い。私達の思いを天の高みまで引き上げ、心を広くしてくれる。このようなイザヤの預言から、今年も御霊の力をいただきたい。



イスラエル、ユダに対する神の愛惜の嘆き

——イザヤ書（第2回）——

2013年1月27日

聖書朗読 イザヤ書1章2～9節、5章1～3節

「冷ゆることの至りて甚だしきときなれば也」という一年で最も寒い大寒の日曜日に、懐かしい兄弟姉妹（Mさん、Iさん）も参加されて聖霊に満ちた集会が持たれました。

奥田先生は、冒頭から深い福音の奥義を語られました。ご講筵の中で、深く感銘を受けたいところをご紹介します。

クリスチャンは、自分や家族の幸福を超えた祈りを持って欲しいものです。自分だけの救いを求めることから解放され、キリストの心を心として他者のために働くという大きな願いを持っていただきたい。神様の心を忠実に実行している人が神の国に入ることができるとです。

そのためには、主が全てであり、主の御旨のみが成ってください、主から与えられた使命をなさしめてくださいという祈りを持って、一人一人が主の福音体とならねばなりません。このことは、特別のことをするものではありません。我々の日々の生き方が人間的でありながら、人を超えた愛に根ざしたものであり、この世とは何か違う質の究極のバックボーンを持っており、それを支えている方が背後におられること、そのようなことが自ずとわかってもらえるような生き方をすれば良いのです。

それには、地上のことに捉われることなく、イザヤ書30章15節および18節に示された神の約束に対する絶対的な信頼を持ち貫き、たとえば、明日終わりが来ても、アーメン・ハレルヤと言えるように、今日一日を神様の御旨にそって大切に生きていくことが求められます。



インマヌエル、神我らと共に

——イザヤ書(第3回) 6、7章——

2013年2月3日

聖書朗読 イザヤ書6章1～8節

高校の部活動において、指導者による暴力によって生徒が死に追いやられる事件が相次いだり、柔道のオリンピック候補選手が指導陣に対し不信感を表明したりしています。桑田真澄は、

「暴力指導を受けて、良い事は何一つなかった。指導者の役割は、指導を受ける者が自分で考えることができる環境を整えること」

と話しています。日本社会全体の問題点の一つは、対話やコミュニケーションによってお互いを的確に知ることが欠如している点だと思います。

奥田先生は対話やコミュニケーションを大事にしてくださるので、誤解があっても修正が可能なので、有り難いです。キリストの福音は、

「主の十字架によって罪赦された者は、主のように主の十字架を担う生き方をさせられる」

という点で、人間にとって厳しいものではありませんが、果敢に十字架を担う生き方を実践する者には、主の聖霊による(としか言いようのない)甘美や自由を味わうことができるのも事実です。キリストこそ、我々の心の扉をいつも叩いて、我々の側からは飢え渴きの祈り、キリストの側からは聖霊という形で我々との対話やコミュニケーションを大事にしたいと願っておられるように思います。

奥田先生の講筵は、終始キリストの生命力に溢れていると感じます。旧約の時代のイザヤ書を聖書辞典や旧約聖書略解を基に的確に読み解きながらも、それに縛られることなく、新約のキリストを常に眼前に置きながら、キリストの知恵と力をもつてイザヤ書の本質を力強く語られるので、知性(理性)と霊性(聖霊)の両方が奥田先生の語られる福音にはあるので、受け取る側は納得できます。

先生は、京都キリスト召団員の在り方として、以下の三つを提示されました。

- ① 日々の生き方において主を証しする。
- ② 他への無私の愛。

③ 集会の役割(伝道)の自覚。

この果てしない生き方を日毎実践していくには、日々飢え渴きの祈りによって主へと立ち帰り、主から聖霊と知恵と力を頂き、我が想いが否定される(主の十字架を担う)ことが必要になってくると思います。



それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり

2013年2月10日

聖書朗読 ヘブル書11章1～16節

鴨川べりの柳の枝が、心持ちうぐいす色を帯び揺れている。寒い日が続くが、冬の日射しの中にも「春」があちこちで認められる。

今日の講筵は、最近、京都の集会場（奥田先生宅）の1軒隣が空くこととなり、この不動産（土地・建物）を購入する意義、意味等に焦点を絞った集会に導かれた。その詳細は直接、講筵テープを聴いていただく必要があり、「集会だより」で軽々に要約することは出来ない。しかし、この問題は、京都集会の将来を見据えて、新たな出発、飛躍を期するため、その素地となる大事な事柄であり、「集会だより」をいつも目にしてくださる方にも「支えの祈り」をお願いしたいと考えるので、集会で語られた一端を以下に記載する。

京都集会は、その会場を奥田先生宅にお世話になっているため、日曜日の聖日集会の度に個人の生活領域に私達集会員が入り込むと共に、集会関係の機器、備品をはじめ、書籍、テープ類などが多くの場所を占領している状況にある。このため、奥田先生の日常生活、研究、事務作業等にも多くのご不便をおかけしている。そのことは、O姉妹が早くから気に掛けてくださり、今回の話は、Y奥様の長年の祈りが聴かれたものである。

今日の講筵で奥田先生が話された不動産購入の重要点を、以下、3つにまとめてみた。

① 契約は「一般財団法人 京都キリスト召団」の名で行うが、従来の「京都キリスト召団」は厳然として存在し、この「京都キリスト召団」の活動を支えるものとして法人が存在するものであること。

② 「京都キリスト召団」の集会が、今後も継続性を持ち、次の世代にもバトンタッチ出来るよう代々続いて欲しいとの願いが根底にあること。

③ 今回のことは経済問題ではなく、あくまで「信仰の問題」として受け止めて欲しいこと。そのため将来に向かって長い視点で状況を受け取り、「主が必要な物を備え給う」の心根で各自が一層、主キリストの信を戴き、熱く燃やされ、「信仰に由りて」今回の物件を真の「神様からの贈り物」として欲しいこと。

講筵の終わりに、ヘブル書10章32節から11章16節の御言葉をいただいたが、この勧めを各自の祈りの力として、契約、履行の日を祈り待ちたい。



この火すでに燃えたらんには我また何をか望まん

2013年2月17日

聖書朗読 ルカ伝12章49～50節

京都の街を囲む山々が薄い雪化粧をし、空気も張りつめた2月第3日曜日になりました。集会の初めに、2月14日奥田先生の御宅から南側二軒目の土地と建物を京都キリスト召団（一般財団法人）が取得する売買契約が締結されたことが、報告されました。京都キリスト召団（集会本体）が、信徒の集まりとして持続していく一つの基礎が築かれ、それゆえ、召団を形成する私達の中に、主様の聖霊が宿り、召団が火の燃え続けるところとして生き続けていかなければなりません。

「二月が転換点（Wendepunkt）になる」

という奥田先生のことばを、私達が現実にしていくことが課題として与えられました。聖言と祈を日常生活の中に。

ご講筵はルカ伝12章49、50節から題が抽出され、

「戦闘の福音継承」

が響く、熱い宣教が展開されました。主様の御思いが汝を生かしめる。先生と奥様による集会の建設と重なり、

「生き続けよ召団」

と使命が与えられる講筵でした。



今日も明日も次の日も我は進み往くべし

— ルカ13・33 —

2013年2月24日

聖書朗読 コリント前書13章(全)

奥田先生と共に京都召団を支えてくださったY姉妹が、キリストの元に行かれてから一年が経ちました。通常の集会と食事会の後、ミニ感話会を開き、参加者はY姉妹との思い出や姉妹への感謝の気持ち、クリスチャンとしてのこれからの決意などをそれぞれ語りました。奥田先生は、新聞で取り上げられていた100歳を超えてなお背筋がピンと伸びた元氣なご夫婦の姿に刺激を受け、

「あれに負けたらクリスチャンの名折れだ」

と、後10年の命としていた言葉を撤回し、無期限に改められました。それはこの世の命が明日終わるかも知れないし、主の御心であれば100歳までも生きるということを意味していて、いつ天に召されても良い覚悟で行くということです。そういうわけで、天に召されるまで生命力溢れる元氣な姿でいるために、先生は健康面に配慮して今までの夜型生活から朝型生活に変えるとのことでした。故障している足も治して、イザヤ書40章30〜31節のような、

「若者も壮年の者もいつか疲れ果てるが、主を待ち望む者は新たな力を得、わしのように翼をはって、のぼることができる。走っても疲れず、歩いても倦^うまない」

姿を本気で体現したいと話していました。

近頃の先生は本当にお元氣で、主の御言葉や小池先生やパウロの言葉が生命力を伴って自由自在に溢れ出しています。あの御姿を拝見していると、小池先生の著作を通して小池先生が、パウロの手紙を通してパウロが、福音書の主の言葉を通してキリストが、靈となつて奥田先生に働きかけておられると感じます。キリストの

「我が言葉は(神の)靈なり生命なり」

の言葉通り、

「キリストの言葉＝神の靈(聖靈)・生命」

であるので、キリストの言葉やキリストの靈によって書かされた小池先生の著作やパウロの手紙などを受け取ることは聖靈を受け取ることにあります。従って、キリストの言葉や小池先生やパウロなどの言葉をしっかりと受け取っておられる奥田先生は、聖靈のバプテスマ(洗礼)の経験は無くとも、聖靈をしっかりと受け取っておられるということになります。



己が身を献げる

2013年3月3日

聖書朗読 ロマ人への書12章1～18節

3月になったものの、唱歌早春賦の「春は名のみ風の寒さや」を思い出す寒さでしたが、差し込む光は確実に春の到来を告げていました。その中で持たれた集会は、我々はいかなる状況にあっても主の光によって照らされ、導かれていることをはつきりと示すものでした。

今日の主題のロマ書12・1～18は、パウロが我々に日常生活を送るについての指針を直々に語ってくれた貴重な聖句です。その1節1節を熟読すると、主が我々に対して何を求めておられるか、どのような生き方を求めておられるかがよくわかります。

12・1の

「己が身を神に献げる」

とは、日々の生活において何をするについても、それが神・キリストへの霊的な礼拝であるということ。主の御旨のみが成つてください、主から与えられた使命をなさしめてくださいという祈りを持って日常の業を行うことです。

そのためには、ロマ書8章でパウロが宣言している十字架・聖霊（御霊）の事態を体得し、主から原動力をいただかねばなりません。

これまでの人生の歩みから自分の幸・不幸を判断するのではなく、主が何をしてくださったのか、どのように導いてくださったのかという主の賜わった恵みに目を向け、その視点から自分の人生を振り返ることが大切です。そのような角度で、祈り心を持って日々の業を行うと万事が益（プラス）となることがわかります。箴言3・1～12も、全ての道で主を大切にせよと勧めている大事な箇所です。



肉の念い、霊の念い

2013年3月10日

聖書朗読 コロサイ書3章1～17節

3月10日の聖日、京都市内では「京都マラソン」が開催され、集会場のすぐ横の鴨川河川敷を多くのランナーが走り抜けた。応援の黄色い声が集会場のマイクにも届く。

この河川敷を通行する人で、近くの2階座敷において日曜ごとに主キリストを讃える集会が守られているのを知る人は少ない。しかし、集う者は、それぞれ祈りの課題を胸に持ち、主キリストからのメッセージを受け取り、^{たましひいのち}霊に生命をいただいて、再び主にある働きの場へ帰る。ある者は笑みを浮かべ、ある者は元気をいただき、今週も主の働き人たらんと思いつつ。単純ではあるが深く、静かながら熱く燃やされる、世に稀な集まりである。

今日の講筵は、コロサイ書、ロマ書、詩篇などから御言葉を学んだ。奥田先生の御言葉をベースにしての講筵は、聖書のどんな切り口から始めてもキリスト讃美へと展開していく。印象に残った今日の御言葉を書いてみる。

「汝ら上にあるものを念い、^{おも}地に在るものを念うな。汝らは死にたる者にして、其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。」（コロサイ書3章2、3節）

「肉の念いは死なり、霊の念いは生命なり、平安なり。」（ロマ書8章6節）

詩篇は私達の心を祈りと神讃美へ導く。

「主は恵みふかく^{なさけ}憐情満ち、また怒り給うこと遅く、^{あわれみ}憐憫おいなり。」（詩篇145篇8節）

「日よ、月よ、星よ、主をほめたたえよ。……若者よ、乙女よ、老人よ、幼子よ、みな主の聖名を^{みな}ほめたたうべし。」（詩篇148篇）

これらの御言葉を日々の糧として受け取っていききたい。

講筵の終わる頃、窓の外から「ゴールまで残り7キロです。頑張ってください。」と繰り返すスピーカーの声。私達は集会の終わりに、雨の中を走り続けたランナーに、讃美歌370番（めさめよ、わが霊）を力強く歌ってエールを送った。



汝を我が栄光のために創造せり

——イザヤ書43・7——

2013年3月17日

聖書朗読 イザヤ書40章(全)

今回の集会の主題は、

「お前を、私(神・キリスト)の栄光のために創造した」(イザヤ書43・7)

というものでした。奥田先生は、盲人がキリストによって目が見えるようになった例え話を引き合いに、御自身もキリストによって、暗闇から光の世界へ入れられた感謝・喜びがあり、それを述べ伝えたいと語っておられました。

私たちは、創造者(神・キリスト)の被造物であり、

「人間が神との交わりの中で永遠に幸せに生きることが、神が人間を創造した目的である」

と、主はサンダー・シングの著作の中で語っておられます。

人間は、その人自身の自己目的のために生まれ存在しているのではなく、神の栄光の体現者として創造されたことは、自分の何かを抛り所にする生き方の限界を知り、自分を越えた大いなる者に救いを求める心根になり、自分や人からは絶対に得られない平安や本当の生命力を神・キリストから頂くようになると、自然と分かるようになっていくのだと思います。神・キリストの豊かさ・御力を体験し、自分の貧しさ・頼りなさを実感すれば、自分は神・キリスト無くしては存在できないことが事実として理解できるようになります。

自分の弱さを知り認め、神・キリストにすがって日々を誠実に黙々と生き働く者となれば、キリストは時を見て、その人にとって一番良いようにしてくださるのだと思います。そうして、自分では絶対に超えられないと思える困難を突破させて頂く経験を繰り返し体験することで、自ずと神・キリストの凄さを証しすることになり、その結果として神・キリストの素晴らしさ・栄光がその人を通して世に示されることになるのだと思います。

神の前に誰も自分を誇ることがないために、あえて世から見れば無きに等しい者を神はお選びになった、と言われています。

「馬鹿にして見くびっていたあいつが今あんなに光輝いているなんて。あいつをあのように生かしているのは一体何なんだ？」

ということで、神・キリストの福音が伝えられ、人は神・キリストによって高慢な思いが打ち碎かれることになるのだと思います。



甦りの生命を賜ったキリスト

2013年3月31日

聖書朗読 ヨハネ伝20章（全）

鴨川畔の桜が復活節を待つていたように咲きそろい、雨もあがって、澄んだ空気の朝、2013年復活節集会在「くに荘」で始まりました。奥田先生は、御講筵「甦りの生命を賜ったキリスト」のために選択された聖書抜粋（A3版3枚）を参会者に配付され、この集會に並々ならぬ気魄をもつて臨まれました。

「主様の生きられた生命の次元と地上の論理や法則の次元は全く異なっている。主様は天の次元をもつて地に突入された。」

御講筵の劈頭に奥田先生の中に渦巻く聖霊の叫びが炸裂しました。そしてゲッセマネの祈と十字架の贖いを主様が御自身を棄てて身に受け、我らに「永遠の生命」を与え給うたとき、それゆえ十字架は輝く十字架になっている。私達は、天に召されていった愛する魂に扶けられ、共に働き、主様に投身し、主様の御姿の栄光に輝くのだと、聴きつつ祈りに引き込まれていました。



為ん方尽くれども希望を失わず

2013年4月7日

聖書朗読 コリント後書4章

春風に桜の花が散り急ぐ。「そんなに急がなくてもいいよ。」と呼びかける。花見の時期を過ぎていよいよ若葉の季節が始まる。

先週の復活節集会では、

「死に打ち勝って甦り、我らに『永遠の生命』を与え給うたキリスト」

の事態に、私達も入れられていることが熱く語られた。これを思われた世界とするのか、現実のものとして受け取って行くのか、主様から問われている。

今日の講筵は、コリント後書の御言葉を学んだ。肉の体を持ち、この世に住む私達は、

「心は熱すれども肉体弱きなり」

で、思い通りにいかない事も多い。「八方ふさがり」、「万事休す」など、氣力を失わせる言葉も聞こえる。今日、奥田先生が語ってくださったように、私達には生活の場が「証^{あかし}の場」であり、この世の生活とキリストに在る生活とは一体で分離出来ない。しかも私達は

「手づから働き」

「患難にも、労働にも、眠らぬにも、大いなる忍耐を用い」

「凡ての人の前に善からんことを図り」

「わが体を打ちたたきて、之を服従せしむ」

などの御言葉を心に秘めている。奥田先生は、今日、どんなに一生懸命にやつても思い通りにいかず、無力感や失望感にさいなまされることもある実生活の中から、コリント後書にある慰め深い御言葉を語られた。

「われらを凡ての患難^{なやみ}のうちに慰め、我等をして自ら神に慰めらるる慰安^{なぐさめ}をもて、もろもろの患難に居る者を慰むることを得しめ給う。」（コリント後書1章

4節）

「光、暗^{やみ}より照り出でよと宣^{のたま}いし神は、イエス・キリストの顔^{おもて}にある神の栄光を知る知識を輝かしめんために、我らの心を照し給えるなり。」（コリント後

書4章6節）

試練の中にある兄弟、姉妹に、主は近くいまして慰めと希望の御言葉を賜う。主が、天の万軍が、そして主にある兄弟姉妹が、人知れず手を合わせている。あなたは一人ではない。



祈り入る

2013年4月21日

聖書朗読 使徒行伝1章1〜14節

春になって、自然界の植物や生き物達は新たな命を生み出しています。彼らは、一言の言葉も語らず、与えられた生命を精一杯生きようとしているように見えます。人間は、神・キリストによって創造された物の中でも、言葉や知性の他、特に自由意思を与えられた特別な存在ですが、その言葉や自由意思の乱用によって、自然界や幼子のような、真つすぐ伸びていこうとする本来の生命力から遠く離れることになります。そうした人間のために、本当の霊の生命（聖霊）を与えんがために、キリストは今も天界に存在しておられます。しかし、霊的な賜物（キリストの聖霊）と無縁の生き方や、利己主義による周囲の人間を害する生き方（その果ては、似た者同士が互いに傷つけ合う、自らが選び取った永遠の生き地獄です）から解放されたいと心底願うまでは、神・キリストは決してその人を聖霊によってお救いになることはありません。なぜなら、神・キリストは人間の自由意思に干渉されないからです。それでも、キリストはその人が救われ神に立ち帰ることを願っておられます。

奥田先生は、召団の今後の在り方を模索しておられます。先生の願いは、小池先生が受けられたキリストの福音を核とした、キリストに感謝・讃美を捧げる、世に生きる生活者の集まりとして、召団が存続して欲しいということです。集会の形態はともかく、キリストの十字架・聖霊の炎が各人に燃えているかだけが問われていると言われます。

主の聖霊の炎がその人の中で燃え、新生を体験し力を得るためには、十字架の主を思い描き、

「十字架の主に自分を投げ入れて主と一つとなる」

ことが必要になります。このような「祈り入る」態勢になるためには、頭だけの信仰や祈りではどうにもならず、普段の社会生活・日常生活を生きている中で、霊的な飢え渴きを満たすべくキリストと一つになって生き働き、キリストの福音を身をもって証しする必要があります。

「働きのない祈りは、祈りのない働きと同じくらい悪い」

とキリストがサンダーシングに語られている通りです。



報い

2013年4月28日

聖書朗読 マタイ伝福音書6章1～18節

集会の最初に、先生は、我々一人一人が何故この集会に集っているかを思い起こし、今一度その意味と重責を考えてくださいと切り出され、マタイ伝とルカ伝を引用しながら、「報い」と題して福音の深い真理を語られました。

この世では何かをすると、それに対する報いとして、感謝、尊敬、賞賛などを頂くのが当然のこととされています。したがって、何かをした時に結果が伴わず、これらの「報い」が得られないと失望、落胆いたします。それは、結局のところ自分という限られた世界の価値基準の中で行っているから、期待通りにならないと失望し落ち込むことになるのです。ところが、自分の期待する「報い」を求めないようになると、人に代わって神様が報いてくださいます。親子の間でも、夫婦の間でも、また職場での働きの場においても、相手のために良かれと思って尽くす事、真心こめて働くこと、そのことの中に神の祝福が宿るのです。また、「報い」を期待できないが、助けを必要としている人に対して行ったことは、キリストに対して行ったことになります。マタイ伝25章31～46節の「羊と山羊」の区別、ルカ伝14章12～14節の饗宴への招待の話は、正にその消息を記述したものです。

神からの「報い」を受け取ることができるか否かの分岐点は、主にあって行うか否か、にあります。主にあって行うとは、結果や現象に捉われないで、誠実に努力することです。必ず、御霊の助けにより全てが益となつて祝福されます。

自分は、この世で報われなかったと思う時、讃美歌121番（「まぶねのなかに」）の

「すべてのものを 与えしすえ

死のほか何も 報いられで」

のキリストのお姿を思い浮かべてください。私（奥田）は、これを涙なくして歌うことができませ



あなたも、あなたの家族も救われる！

2013年5月5日

聖書朗読 使徒言行録第16章6～34節

M兄を天に送って1年が経過した。四国高松の地で、お忙しい大学の公務の傍ら、T奥様と共に

「十字架、復活、聖霊一如の主キリスト」

を伝えて止まれなかった。文書伝道では、四国キリスト召団日より「ともしび」誌を1987年から2006年まで170号余にわたり発行され、各地に点在する兄弟姉妹に届けられた。病を得てからも、主にしっかりとつながり、幾多の困難を超えられたご夫妻の存在は、多くの人の心を打った。今、T奥様が京都集会に連なり、祈りを共に出来るのが嬉しい。

本日の講筵の始めに奥田先生は、御自身が書かれた「天命を知る」と題する所感の文章を紹介くださった(エン・クリスト第53号「1993年1月冬季号」に掲載)。大学教授という激務の中、キリストを伝える使命を全うしたいとの思いから、苦闘しつつ歩まれている先生の姿が書かれてある。以下に、先生が力を込めて読まれた箇所を抜粋する(詳細は、文章にあたって頂きたい)。

① 京都キリスト召団は「使徒的信仰」の道を歩みたいとの願いで出発したこと。
② 普通にこの世の職業に携わり、悩み・苦しみを一杯背負った人間が、その身そのまま、キリストの無条件の救いにあずかり、キリストの無量なる愛、無量なる生命を賜って喜びと感謝に溢れて生きることを願って来たこと。

③ できるだけ生活のリズムを崩さず、己を審かず、為すところ凡て主キリストの名によつて為し、他人と比較せず、主様と自分、一対一で向かい合うこと。

今日の講筵では使徒行伝16章を中心に学んだ。その中で、主が、リディアという婦人の心を開き、パウロの話を「注意深く」聞かせ、その結果、彼女もその家族も一緒に洗礼を受けた記事が心に残った。主は、その人にふさわしい時、不思議な形で働かれ、その人の心を開かれる。その人の心の中に祈りが積まれていたからであろう。主を求める小さな若芽は、主の働きと兄弟姉妹の執り成しの祈りによつて成長していく。

今日、新しく学生の姉妹が集ってくださったが、鴨川畔のこの祈り場を主と出会う場として、新しい歩みを始めていただきたい。

「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」
これは、私達が賜った御約束の言葉である。



聖霊のキリストの御業

2013年5月12日

聖書朗読 使徒言行録3章

五月晴れの鴨川の畔の祈りの家では、使徒言行録に沿って聖霊に充ちた集会が持たれました。

今日は、右図の構造をしつかりと受け取ることが講筵の中心課題でした。

使徒言行録は、復活されたキリストが聖霊となつて生き生きと働かれ、イエス・キリストの名によつて奇跡的な御業が行われたことを記述しています。他方、現在のキリスト教会に欠けているのは、聖霊のキリストが働いていないことです。聖霊のキリストを受け取つて内的に変革されないと、金銭、名誉等の外的なものに目を奪われてしまいます。我々の中に聖霊のキリストが宿っているか否かは、この世での生き方に現れます。どのような状況にあつても感謝、賛美、喜びがあるか、辛いことに会つても直ぐに立ち上げられるか、根底において何を求めているかが大事です。

そのためには、

「主様、聖霊をください」

と十字架上の主キリストに真剣に祈り入ることです。そして、この主キリストに全てを白紙委任し、御霊（聖霊）のキリストに在つて黙々と日々の業をすることです。そうすると、人や仕事に対する在り方が変わってきます。人に対しては「愛」を、仕事に対しては「誠実」を第一とする生き方に、自分の栄光を求めない生き方に変わって行きます。

（ユーストリームをご視聴ください。ポータルサイトから「京都キリスト召団」で検索し、パスワード「Kyoto928」を入れてください。）



人に従うよりは神に従う

2013年5月26日

聖書朗読 使徒言行録5章12〜42節

「羊の羽と僕のうれしい日 I 二十歳の感謝展」

が5月17日から同20日まで開催された。会場には、「2人の青年の絵と字」と「母の書」を合わせた作品が並んでいる。その描かれた言葉が、観る者の心に静かに入ってくる。ダンディーな父は、カメラマン・接待担当として活躍。会場は贈られた花で一杯。家族そろっての手作りの感謝展は、訪れた人に青春の日を思い起こさせ、生きる勇気を届けてくれた。今日は聖霊降臨祭集会であり、使徒言行録1章から6章までを学んだ。初代の使徒たちに顕れた「聖霊」の御業の事態が、使徒言行録にはありありと書かれてある。その御業の原動力は、人から出たものではなく、主キリストの名によるものであり、イエス様に根拠がある。私達は平伏しの心で、主の御業がこの身をとおして成ってくださいと祈るのみである。

これらの章から、「聖霊」に関する御言葉の一部を文語聖書でたどってみる。

「聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力を受けん」(使徒1章8節)

「イエスは神の右に挙げられ、約束の聖霊を父より受けて、汝らの見聞きする

此のものを注ぎ給いしなり。」(使徒2章33節)

「……イエス・キリストの名によりてバプテスマを受けよ、さらば聖霊の賜物を受けん。」(使徒2章38節)

奥田先生は御自身の経験を交え次のように語られた。

「私達にとつて大切なのは日常生活です。皆さんの主にある日々の働きの中に、主の栄光が顕れます。どこまでも僕の姿に徹することです。キリストの方から私(奥田先生)を抱きしめてくださり、

『お前と私とは一つだよ』

と言つてくださる。これが私にとつて聖霊のバプテスマです。」

集会後の食事会では、「二十歳の感謝展」を観た印象や、会場に来てくださった多くの方の様子などで話が弾んだ。Iさん御一家、お疲れ様でした。次回を楽しみにしていますよ。



わが歩むべき道に導きたまえ

2013年6月9日

聖書朗読 詩篇32篇

6月1日、2日(土、日)の両日、静岡県御殿場市で裾野キリスト召団主催の「福音特別セミナー」が開催された。主題は「キリスト召団の使命と課題」で、講師の奥田先生から、キリスト召団に連なる者の「信仰の中心」、「召団の使命と課題」の自覚、現実生活での具体的実践と継承等について語って頂いた。その具体的な内容は、大きくて深く、私が要約して述べることはとても出来ない。しかし、京都キリスト召団では次週の集会で、セミナーの配付資料に基づく学びを行い、これらの問題を一人ひとりが自分の問題として考えることになっている。

セミナーで、K兄弟が喜びにあふれた表情で感話されたのが印象に残った。K兄弟は、「これまで瓦礫の下にとらわれていたが、瓦礫が取り除かれて解放され、自由になった感じがする。小池辰雄先生から学んだ信仰の事態を、隣人に伝えないではいられない思いを強くしている。」

と力強く話された。

奥田先生は今日の講筵の中でK兄弟のことに触れ、

「中高年の方が主の御力を得て、それぞれの場で生き生きと生きることが大事。年を増し加えても、歓びにあふれており、益々輝き出すクリスチャンでありたい。」

と話された。今日の集会では詩篇32篇から34篇までを学んだ。詩篇は、切なる祈りがあり、讚美の歌があり、慰めに満ちた言葉がある。私は時折、聖書を持って近くの山に登り、びわ湖を眺めながら詩篇を読むが、とても気分が良い。今日学んだところから、味わい深い詩篇の箇所を書いてみる。

「**悪しき者は悲しみ多かれど、主に依頼む者は憐憫にて囲まれん**」(詩篇32・

10)

「**主の使者は、主を畏るる者の周りに営を列ねて、これを援く**」(詩篇34・7)

「**義しき者は患難多し、されど主は皆その中より助け出し給う**」(詩篇34・19)

奥田先生は、詩篇の御言葉を「祈りへの誘い水」として大事にすることを勧められ、また、詩篇を身読していると自然に祈り心にされていきますと話された。さらに、試練に遭つても、なお立ち上がって進んで行くためには、御言葉を土台として、キリストの中に深く祈り入ることが大事であると話された。



京都キリスト召団の使命と課題

2013年6月15日

聖書朗読 イザヤ書49章1〜6節

今日は、奥田先生が師事されてきた小池先生やI先生の文章を紹介されながら、「京都キリスト召団の使命と課題」という奥田先生の終生の目標について語られました。小池先生やI先生を直接知る人は僅かであり、書かれた時期も30年から40年以上前なので、現在集う人にはなじみが薄いかもしれません。

今日読まれた両先生の文章を要約すると、小池先生は

「砕けの十字架、いのちの聖霊を受け取ること」

を、I先生は

「福音の真理が日本の現実根ざして日本的に展開するという、使徒的信仰の日本的展開」

を力強く述べておられます。

奥田先生は、両先生の土壌の上に、福音と学問とを両立される中で独自の展開をされて今の信仰を築かれました。その骨子は、6月1、2日の御殿場東山荘の福音特別セミナーで語られ、おそらく夏の特別集会でさらに発展されると思います。

セミナーの講筵の骨子は、

- ① 十字架・聖霊一如の「キリストの福音」の体受。
- ② キリストによる救いは、「恵み」として賜るもの。かつ、無条件、絶対なるものである。

- ③ 十字架を本当に受け取れば、必然的に聖霊が臨在し給う。

- ④ キリストの愛に圧倒されて生きる。自分の信仰なんか問題にしない

です。我々には、大変難しい課題のように見えますが、その秘訣はイザヤ書49章に書かれています。主様は、我々一人一人が神の栄光の現れであることを願っておられます。主様が選ばれた以上、必ず力を与えてくださり、人から何と言われようと、自ら選んだ大事な子として重んじてくださるのです。我々の存在そのものが主の栄光である生き方をするこ

とが、主様の願っておられるエクレシアを、京都キリスト召団において実践して行くことになるのです。



ステパノの殉教とピリポの伝道

使徒言行録6章～8章

2013年6月23日

聖書朗読 コリント後書5章14～21節

梅雨に入ったというのに雨が降らず、空梅雨かと思われたが、最近になってやっと雨が降り続くようになった。恵みの雨で、紫陽花が雨に揺れている。

今日の集会では使徒言行録6章から8章までを学んだ。ステパノによる「イスラエルの歴史」についての演説、ステパノの殉教及びピリポの伝道などである。

講筵では、今の私達にとって旧約聖書を学ぶ意義と方法についてのお話があった。以下、奥田先生が語られた内容をスケッチしてみたい。

「私達にとって一番大事なのは、生命いのちを与えて止まない霊なるキリストです。キリストは、旧約の中でお生まれになったが、旧約に縛られていなかった。私達は、このキリストに導かれて旧約を学ぶのです。旧約聖書が証しているものをキリストの光で見えて、その養分を頂くわけです。そして、大和民族に相応しい福音を、キリスト直結の福音を受け取りたいのです。」

「福音は、生活の中に生き活きと生きていなければ意味がありません。私達は福音を実証する『実務家』なのです。キリストは、

『蛇のごとく慧さとしく、鳩のように素直すなおなれ』

と言われたが、現代に生きる私達も、幼子の如くキリストに信頼する心と、キリストの智恵と能力をちからをいただいて生きる、という両面が必要です。この角度で旧約聖書を受け取っていきましょう。」

その他、ステパノの殉教にあたっての祈りに胸を打たれた。

「主イエスよ、わたしの霊をお受けください。……主よ、この罪を彼らに負わせないでください。」（使徒言行録7章）

今日の集会には、奥田先生の「ラジオ深夜便」の放送を聴かれた福岡在住のY姉が初めて集ってくださいました。姉は集会後、奥田先生の講筵録数部を喜び一杯で受け取り、宝物のように鞆に入られた。遠くて集会に出ることが出来ない残念そうな顔でおっしゃるの

で、夏の特別集会の話をすると、是非案内をいただきたいと目を輝かせて話された。



パウロの回心と献身

2013年6月30日

聖書朗読 使徒言行録9章1～31節

巣立ちしたばかりの子ツバメが、電線にとまって「チチチチ」とさえずり、親ツバメから餌^{えさ}を貰っている。しつかり食べて「渡り」に備えて欲しいと祈る。

集会の始めの聖書朗読で、使徒言行録第9章を読んだ。15節の御言葉が、集会に集う一人ひとりに対して発せられていると響いてきた。

「汝は、同胞らに私（キリスト）の名を伝えるために、私が選んだ器である。」

今日の講筵は、パウロの回心と回心後の働きの場面に焦点を当てた熱い御霊の集会だった。私達は、真にキリストの有^{もの}としていただき、主様とともに苦しみを担い、主様の御力^{みちから}を受けて一切を為すように選ばれている。以下、奥田先生が語ってくださったメッセージを再現してみたい。

「この世に生きるクリスチャンは、主様から生命^{いのち}を受けるとともに、苦しみも共にする者として選ばれています。私達は、この世の務めを精一杯やると同時に、他方でキリストを伝える役目を賜っています。この二足わらじの道は生易しいものではありません。私達は自分の身を実験台として、これを実証していく責務があります。それは人間の力で出来ることはありません。主様に直結し、聖書に日々、真剣に取り組み、

『主様、どうぞ力をください』

と祈り心で為す必要があります。パウロは主様からの直々のバステスマによってひっくり返され、その後、キリストの僕として誰よりも多く働きました。私達も「回心」即「献身」です。即ち「回心」が本物ならば「献身」も本物のはずです。

『主様、新しくされた私のこの身を捧げて参ります。』

と主に委ねていきましょう。主様に生き活きと働いていただきましょう。それがローマ書12章1節の

『己が身を神の悦びたもう潔き活ける供物^{そなえもの}として献げよ、これ霊の祭なり。』

です。皆さん、キリストの御名のために、燃えて、燃えて生きていただきたい。」

集会後、月1度の食事会のあと、総会を行い、夏の特別集会のこと、事務的なことなどを協議した。また、「集会だより」（5月～6月）の発送を行った。



ルダ、ヨッパ、カイザリアでのペテロの働き

使徒言行録9章32節から11章18節

2013年7月7日

聖書朗読 使徒言行録9章32～43節

7月7日は、奥田先生がI先生を通じてキリストに出会われてから57年目の記念すべき日でした。奥田先生は、その後、愛唱の讃美歌285番（「主よみてもて」の歌詞のとおり）に導かれて忠実にキリスト道を歩んで来られました。京都キリスト召団は、これを原点として始まります。ここに集う我々は、一人一人がキリストに直結するとともに、集会を継承発展させるという栄光ある使命を托されています。

今日は、使徒言行録9章から11章を通して主の聖霊が臨んだペテロにおいてなされた業を語られました。9章40節にはペテロがタビタを蘇^{よみがえ}らせた記事があり、主がヤイロの娘を蘇らされた記事（マルコ5章41節以下）を彷彿させます。これらの記事は、地上の生死の問題について語られているようですが、実はそれを超えた深い啓示が語られています。この世のどのような出来事にも、主の御心が働いており、主の御心になうことは何でもされることを示しています。地上で助けられるか、天国で助けられるかには、大きな違いがあるように見えますが、本質は同じなのです。地上で生きることと、天国で生きることとは連続しているのです。自分は、キリストからどのように思われ、どのように導かれようとしているのかを常に思ってください。物事を地上から見るとは、観点をキリストや天上に置いてください。この地上に捉われずに、目を転じて永遠の相においてみてください。そうするときに、全ては一変します。暫くの患難も、大きい永遠の栄光に変わり、苦難にあっても、喜んで生きることができるようになります。我々は、どのようなことに出会っても天の万軍によって守られているのです。



「ヘロデの迫害とペテロの救出」、「アンテオケ教会のパウロとバルナバ」、「パウロとバルナバの第1次伝道旅行」

2013年7月14日

聖書朗読 使徒言行録第12章1～19節

夏休み前というのに真夏の暑さが続いている。先週末、やっと恵みの雨が降り、家庭菜園の水遣り作業から解放されたが、野の草は日照り続きでも元気である。

京都集会では使徒言行録の連続講筵が続いている。毎回、数章を読み進み、口語訳をベースに、新共同訳、文語訳にも触れ、注解書による解説に助けられながらの学びである。奥田先生の解説をいただき、聖書地図で福音伝道の地を確認しながら読み進むと、聖書の記事が身近に感じられ、活き活きとした初期福音伝道の様子が胸に迫ってくる。

今日の講筵では、使徒言行録11章後半から14章までを学んだ。印象深かったのは、ペテロが牢獄から救い出される記事と、バルナバ及びパウロの伝道旅行の記事だった。ペテロは牢獄につながれているが、教会ではペテロのため熱心な祈りがささげられていた。主の天使の導きにより鎖が解かれ、鉄の門もひとりでに開き、ペテロは解放される。ペテロのことを祈っていた兄弟との出会いの場面など、当時の様子がまことにリアルに書かれている。

パウロらの伝道旅行の記事では、魔術師との対決、パウロの大演説、聖霊の癒しがある一方で、ユダヤ人から厳しい迫害にも遭う。じっくり味わいたいところだ。

以下、奥田先生の語りの一部を記載する。

「パウロは臆することなく熱心に福音を述べ伝えました。パウロにキリストの霊が乗り移り、キリストが使徒達を通して霊の延長戦をやっているようです。キリストは本気で私達のために生命^{いのち}をかけてくださった。そのキリストの愛の本願、祈りが私達にも注がれてあります。主様は、御自身が味わった素晴らしい次元を、私達にも与えるよと約束し、無限無量の愛を注いでくださっています。皆さん、主にあつて熱い^{たましい}霊^{たましい}になつてください。」

今日の集会に、前日、奥田先生と研究会で初めて会った若き司法修習生の男性が集ってくださった。人生に勉学に、今日が「良き師」との出会いであるよう皆さんが祈った。



パウロの第2次伝道旅行

使徒言行録15章36節から18章23節

2013年8月4日

聖書朗読 使徒言行録17章16～34節

8月の第1回集会は、夏季特別集会の準備のための集会として始まりました。

先生は、最初に、

「我々はキリストの生命を後代に伝えるために、日曜日に集っています。救われた人間は救ってくださった方のために何かをする使命があります。キリストの思いを後代に伝えるために献身する使命を托されています。これを端的に表現すると、「回心」即「献身」です。日曜日の積み重ねによって遅^{たくま}しいクリスチャンになってほしいのです。」

と語られ、特別集会への心の準備を促されました。今日の使徒言行録の記事は、いずれも深い意味のある内容でした。

16章には、獄中のパウロとシラスが困難な状況の中で、神に賛美と祈りを捧げている時に起こった不思議な出来事を通し、看守とその家族全員が救われたという感動的な場面があります。そこで語られた

「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。」

という御言葉は、我々自身に与えられたものです。家族のためにこの御言葉を自分の祈りとして行きたいと思います。

17章には、パウロがアテネのアレオパゴス（評議所）で高度な文明や教養を持っていたアテネの人々に福音を語る場面があります。これは、正に我々が現代の人に福音を伝える場面と同じ状況です。この世の知恵や知識を価値基準とする人に対しては、主から深い霊的な知恵と知識を賜って立ち向かわなければなりません。我々一人一人が小さな伝道者であるためには、救われた喜びに安住することなく、絶えず霊的な質の向上に努め、深い知恵と悟りを賜ってこの世に対してゆく必要があります。エフェソの信徒への手紙1章17、18節にあるように、神様が

「知恵と啓示^{けいじ}との霊を与え、神を深く知ることができるようにし、心の目を開いてくださるように」

と祈りながら、日々を過ごすことが求められています。



愛は律法を全うするもの

2013年9月15日

聖書朗読 ローマの信徒への手紙12章9〜21節、13章8〜10節

私達の敬愛するO姉は、9月6日午前101歳のご生涯を終えられて帰天されました。心からご冥福をお祈りします。今日は、主のご臨在のもとに、夏季特別集会の感謝とO姉の追悼という恵み豊かな特別の集会になりました。

長寿とは自分自身のためであることが多い世の中にあつて、O姉は、真の高齢者とはキリストの霊に満たされて輝く「光輝高霊者」（奥田先生の造語）であることを実証されて天に凱旋されました。私達は、O姉が幾多の試練を乗り越えて最後まで主に従われた生き方を通して多くのことを学ばされました。特に印象に残るのは、キリストにあつて慎ましい自立した生活をされたこと、口から流れ出るように聖句を覚えておられたこと、惜しみなく分け与えられたことです。

夏季特別集会は、全国から多数の兄弟姉妹が集まつて開催されました。今回は、各人が今までとは異なる次元の大きな恵みをいただきました。特別集会で先生が私達に伝えようとした核心は、キリストを後代に伝えるために「回心」即「献身」という大きな使命を托されているということでした。

それをどのように実践するかは、今日の集会で選ばれたローマの信徒への手紙12章、13章が明確に指針を示しています。

「兄弟愛をもつて互いに愛し、尊敬をもつて互いに相手をすぐれた者と思いなさい。

怠らず励み、霊に燃えて主に仕えなさい。苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい。」

「人を愛する者は、律法を全うしているのです。愛は律法を全うするものです。」

このことを身に体して実践しなければ、聖書の知識に富み、霊的な能力があつてもキリストの心を心とする真のクリスチャンとは言えません。主様は、日常生活において、地道に上記の聖句を実践することを一番喜ばれるのです。



パウロの第3次伝道

——エペソ及びミレトにて 使徒行伝18～20章——

2013年9月22日

聖書朗読 コリント前書第2章

日中、まだ暑い日はあるものの、朝晩が涼しくなった。夕刻からは虫の合唱が始まり、秋の訪れを感じさせる。さわやかな秋、味覚の秋、そして、祈りの秋である。

今日から、また使徒行伝の学びが始まった。パウロは異境の地で、イエス・キリストを証し、キリストの福音を述べ伝えたが、ユダヤ人の反抗にあったり、律法違反と訴えられたり、宣教を快く思わない者の扇動による騒動に巻き込まれたりしている。苦難の連続だ。しかし、その中でも、パウロ自ら

「キリスト・イエスに在る我が同労者」

と述べた「アクラとプリスキラ」の存在、異邦人がパウロによつて聖霊を受けたこと、若者を生き返らせたことなど、主の御業が成っていく様子を見ることが出来る。パウロの、エペソの長老たちに対する別れの言葉はとりわけ懇切で、今の私たちも心して受け取るべきと思う。以下、今日、心に残った奥田先生の御言葉を記載してみる。

「皆さんは、主から、神の恵みの福音を力強く証しする任務をいただいています。その証しは千差万別です。各人がキリストの栄光体であり、主の栄光が現れる器です。主は、必要なとき、必要な方法で語るべきことを示してください。その場、その場で示されるまま、主の導きに委ねていくことです。パウロが言うように『キリストと、その恵みの御言葉』がより所です。主の御意の成就を願って、どこまでも自分を捧げていくことです。

『主様、いよいよあなたと一つにしてください。』

と祈っていくことです。」

「わが談話も、宣教も、智慧の美しき言によらずして、御霊と能力との証明によりたり。」

「我らの受けし霊は世の霊にあらず、神より出づる霊なり。」（コリント前書2

章から）

消息を一つ。大阪キリスト召団U兄の奥様が、脳梗塞で倒れたとのこと。皆さんへ、お二人のために執り成しの祈りをお願いします。



エルサレムでのパウロの受難と福音の弁明

——使徒言行録21～23章——

2013年9月29日

聖書朗読 ガラテヤ書3章1～14節

昨日、81歳を迎えられた奥田先生は、ソウルで開催された日韓学士院の交流会からの帰国直後であるにもかかわらず、深夜まで集会のための資料を作成されるなど詳細な準備をされて集会に臨まれました。

今日は、パウロの第3回伝道旅行の中で、エーゲ海東南部にある島伝いにシリアに渡り、カイザリアを経てエルサレムに行き、ユダヤ人の民衆の前で福音を弁明した記事を中心に語られました。交通の困難な時代にギリシャからエルサレムまで行つて福音を弁明すること自体が、とうてい人間の思いや意志からなされたものではなく、パウロを突き動かす神様の強い御力が働いたことを物語っています。そして、ガラテヤ書などのパウロの書簡は、いずれも苦勞の多い、困難な旅の中から、深い思索を経て生まれたものです。

私達も、何時か何らかの形で、福音を弁明する時、神様の御前に立たされる時が来ます。そのためには、日頃から、どこに行つても弁明する備えをすることがあります。ペテロ第13章15節に、

「心の中でキリストを主とあがめなさい。あなたがたの抱いている希望について説明を要求する人には、いつでも弁明できるように備えていなさい。」

とあるとおりです。

主様に出会つても、いつも順風満帆である訳ではありません。パウロほどの苦難に遇わないにしても、「なぜ」「どうして」と感じたり、考えたりする出来事に遭遇することがあります。そのような時にこそ、パウロのように主様に自分の一切を明け渡して100%委ねると、主様の深いご計画やご配慮に気づかされ、御心になう生き方に導いてくださいます。



カイザリヤでのパウロ

総督フェリクス、アグリッパ王、総督フェストの前で——使徒行伝23章23節
〜26章

2013年10月6日

聖書朗読 マタイ伝10章16〜39節

彼岸花が終わるとキンモクセイが甘い香りを漂わせるようになった。日の入りも早くなり、秋が進んでいる。

今日は、パウロがエルサレム及びカイザリヤにおいて、民衆・総督・王らの前で、臆することなく福音の道を弁明した記事を学んだ。パウロは、過去の自分が福音の道にある者を迫害し、罰し、死にまで至らしめたことを告白すると共に、ダマスコ途上でキリストの霊に打たれ、その御声を聴いて回心したことを告白する。これはパウロの原体験であり、パウロが使徒として働くにあたって原動力となった事実であろう。

今日、奥田先生から、パウロが訴えられた容疑は3つあることを教えて頂いた。

1つは「世界中のユダヤ人の間に騒動を引き起こしていること」、

2つは「『ナザレ人の分派』の首謀者であること（異端の教え）」、

3つは「神殿を汚そうとしたこと」

である。弁明するパウロは、自分の原体験を語りつつ、訴えられた事実^{じじつ}に理路整然と反論している。2000年前の出来事であるが、告発、罪状、弁明、上訴など、現代の刑事訴訟の基本原則である「適正手続の保障」につながる制度の芽生えが見られるようで興味深い。私達が主キリストを告白するにあたって、本日朗読したマタイ伝10章の御言葉も心して受け取りたい。奥田先生は、この箇所につき次のように付け加えられた。

「私達の心構えとして、主にお任せといった弱気な態度ではなく、主の福音を伝えるとの強い意志、明確な志^{こころざし}が必要です。主と私達弟子との共同作業が必要ということです。そのために告白する者は、心の備えを日常からしておくことです。語りかける人に福音が正しく伝わるように、時と場所^{ところ}を心得て話すことも大切で
す。」

集会のあと食事会、総会を行い、必要な事項を協議した。



ローマへの航海途上でのパウロ

――神の護り――

2013年10月27日

聖書朗読 使徒言行録27章13～26節

木々の葉が黄色みを帯びて秋らしくなったが、ここしばらく、幾つもの台風が来て天候が不順だった。今朝は、久しぶりに青空だ。

今年の春頃から学んできた使徒言行録も、今日でいよいよ最終章となった。私達は、この長い学びの中で、使徒たちが福音を伝えるにあたり、人の思いを越えた聖霊の御業を幾つも為してきたことを知らされた。異邦にあるときも、「主の護り」があり、「主の励まし」があり、そして「主が自ら戦われた」ことにより、使徒たちの言葉、行いが「神の業」として人びとの前に現れた。これは主が言われた

「聖霊なんじらに臨むとき、汝ら能力ちからをうけん。……地の果てまでも我が証人

とならん。」（使徒言行録1章）

の顯れであろう。「使徒言行録」の中に、使徒たちの活き活きとした働きと、慰め深い御言葉が多く残されているのは、その労苦の結晶と思われる。

今日の講筵の中で、ローマに向かうパウロが、幾日も暴風に翻弄され、救出が絶望的と思われた船の中にあつて、人びとに「心安かれ」と力強く語った場面は感動的である。以下、今日の講筵の中から奥田先生が語られた心に残る御言葉を拾ってみたい。

「キリストは皆さんに

『私（キリスト）がいつも一緒だよ』

と言つてくださっています。皆さんは、そのキリストの護りの中にあります。その事態を『はい』と素直に受け取るのが『信』みこころです。御意が成るために、主は私たち一人ひとりを通して働かれます。パウロは護送されたローマで、ユダヤ人たちに神の国の事を説明ときあかして証しをしました。私たちも、日本という仏教の素地が強く、いろんな宗教がある中で、御霊の力により、寛容の心を持ちつつ、主を証しする必要があります。

『私に本当の生命いのちをくださった主様はこれです。』

と、主を差し出して語る事が出来るようになってください。皆さんが主にあつて堅く立ち、一致結束し、内なる火が燃え続ける京都キリスト召団であつていただきたい。」

姉が少しずつ快方に向かわれているとのこと、引き続きお祈りください。



見ずして信ずる者は幸いなり

2013年11月3日

聖書朗読 ヨハネ伝20章19～29節

穏やかな秋の日の集会は、ヨハネ福音書20章を中心にして、一時的な見えるものに一喜一憂することなく、永遠に至る見えないものに目を注いで不動の生き方をする秘訣が語られました。

日常の生活においては、様々な出来事があり、不安になることも、疑うことも、迷うことも、絶望することもあります。しかし、不如意な状況や出来事の奥に隠されてあるもの（見るべきもの）をしっかりと見させていただき、現実の試練や苦難にひるむことなく歩んで行くことが勝利の信仰の道です。

そのためには、霊眼が開かれねばなりません。エマオ途上の弟子たちは夕暮れの食卓において、霊眼が開けてイエスを認めた時、み姿は見えなくなりました。見える旅人の真の姿は、見えない霊体のイエスさまだった。彼らは心躍り、すぐエルサレムに引き返したのです。私たちにおいては、キリストの御霊が宿っていてくださると、見えないものを見ることができるようになります。

私たちは、身の周りの状況に捉われている時、視点を変えて主様に眼を転ずれば（祈り心で主様の中に自分を預ければ）、霊眼が開け、希望が湧き、今の境遇は一時的なものであり、主様と共にある未来には永遠の光があると確信できるようになります。そして、どのようなマイナスな環境も主様と一緒に乗り越えて行けます（讃美歌298番「やすかれわがこころよ」）。試練を通してこそ真の信仰の成長があるのです。それが、キリストが見える世界の奥から語られた

「我は道なり、真理なり、生命なり」

の御言葉を実践していく生き方です。



われ、福音を恥とせず

2013年11月10日

聖書朗読 ローマ書第1章1～17節

北国から我家の近くの野に、冬鳥「ジョウビタキ」が今年もやって来た。胸が栗色、翼に白い斑点があり可愛らしい。これからの越冬を、共に元気で過ごそうと呼びかける。

今日の講筵から「ローマ書」に取り組むことになった。ローマ書を学ぶ根底には、

「二人ひとりが、真の『イエス・キリストの有』^{もの}となり、何時でも、何処でも福音を力強く語ることが出来るように。」

との主の願いが込められている。ローマ書は、これまでも読んできたが、1章冒頭の

「キリスト・イエスの僕、召されて使徒となり……」

とのパウロの自己紹介の言葉に、あらためて胸を打たれた。パウロの、

「主キリストが牧者であり、自分は徹底的に主の僕にすぎない。ダマスコ途上での天からの霊撃体験は私の原点である。」

との告白が聞こえてくるようだ。私達も、主の十字架の贖いによって、パウロさんと同質の生命^{いのち}を頂いた者であり、「選り別たれたる者」としての自覚を大切にしたい。

今日の講筵で奥田先生が強調された御言葉は、ローマ書1章16節の

「我は福音を恥とせず」

だった。この箇所では先生は、次のように語られた。

「当時のパウロにとって、キリストがそれほど認められていない時代であり、

『福音を恥とせず』

との告白は簡単に言えなかったと思います。しかしパウロは、

『私は聖霊^{みたま}のキリストにあつて生きています。十字架の言は、私には神の能力^{ちから}です。』

と大胆に告白して行きました。翻って現代、皆さんがそのように告白することは、色々困難なこともあります。でも主様は私達を生命がけで救ってくださったのです。本当の生命^{いのち}の中に入れてくださったのです。然るべきチャンスに堂々と

『我は福音を恥とせず』

と主を告白し、福音を伝えてください。日々の生活と聖日集会がその修練の場です。」

今日の講筵に、先日、奥田先生を講師として開催された講演会（大阪キリスト召団主催）に参加された兄弟が、友人と共に出席された（合計2名）。御言葉をベースとした白熱の講筵と祈りに、御二人がきつと主の臨在を実感されたのではないかと考える。



神には偏り視給うことなし

——ロマ書第2回——

2013年11月17日

聖書朗読 ロマ書2章1～16節

集会場から眺める鴨川の堤の桜が紅く染まり、静かに秋が通り過ぎていきます。間もなくアドヴェントが始まり、祈りの季節に私達も入っていきます。

奥田先生の御講筵は、ロマ書の第2回（第2章）「神には偏り視給うことなし」と題され、聖書を読むときに、正直に魂に響く御言を受けて、語りかけてくるパウロに対面する、という日々における聖書との対面から始動されました。内なる「すがた」が主様の御心に適う者がキリスト者である、と奥田先生は言われました。日々の生活を送る人間の内面が、主様を求め、主様から祝福され、内から溢れる主様の愛を分かち与えていくキリスト者であるように。それは単なるパリスイ的外形と信仰上の対置を越えており、そこには一向に主様に祈り求める信の生命活動があります。



別の路

2013年11月24日

聖書朗読 ロマ書3章19～31節

錦繡の京都は、紅葉狩りに行く大勢の人でしたが、私たちは祈りの家で、静かながらも内に燃える集会を持ちました。先生は、来年2月28日をもってご自宅での集会を終え、今年2月に購入した鴨川に面した家で集会を始めると宣言されました。今後は、それに備えて必要なものを準備していくことになりました。

今日は、ロマ書の3回目の講筵で、要旨を簡単に書ききれませんが、概略次のとおりです。ロマ書の名宛人であるローマ在住の異邦人キリスト者が対外的に福音を証しする上で、なぜキリストが救い主であるのかを明確に自覚できるように、同時に同胞であるユダヤ教徒にもキリストこそが真の救い主であることを知ってほしいとの切なる願いから書かれた論説であるとの視点からロマ書を読むと、現代の私たちキリスト者の課題との共通点が示され福音の証しに有益である。ユダヤ人は律法を持ち、異邦人は持たないが、心の内に隠れた律法を持っている。律法の究極は

「全身全霊をもって主なる神を愛すること、おのれの如く人を愛すること」

であるが、ユダヤ人も異邦人もこれを全うすることが出来なくて、義なる神の前に誰も己の行いによる義をもつて立つことはできない。

「義人なし、一人だになし」

として神の裁きから逃れようのない存在である。そのような自覚に追い詰められたところに、初めて、「別の路」すなわち、

「功なくして神の恩恵により、キリスト・イエスにある贖罪により」

義とせられる路、

「イエス・キリストを信ずるに由りて凡て信ずる者に与え給う神の義」

へと導かれる。この「別の路」はユダヤ人にも、異邦人にも等しく開かれた道であり、キリストを信受する道においては何らの差別もない。キリストご自身が私たちの路なのです。



律法による義、信仰による義

——ローマ書第4回——

2013年12月1日

聖書朗読 ローマ書第4章1～17節

秋の紅葉が盛りを過ぎて、いよいよ落葉の頃となった。葉を減らした木々は、近づく寒さに向けて冬芽をふくらませ、冬の準備を始めたようだ。奥田先生は、講筵の始めに、改めてローマ書を学ぶ意味について触れられ、この書が現在の私達に、何を語り、何を与えようとしているのか、それを受け取りたいと話された。同胞や隣人に福音を伝える際に、心の底から納得できるものを、理路整然と説明したいと。私達の思いも同様だ。

今日の講筵は、ローマ書2章、3章を振り返りつつ、4章半ばまで進んだ。その概要を説明するのは、ローマ書の論理がやや難解なのと、内容の深さからしてとても難しい。以下は、まことに不十分だが、話された内容の一部を書き留めてみる。

パウロは、ユダヤ人が神の言葉を委ねられ、「律法」を頂いている選びの民であるのに、ユダヤ人もギリシャ人もみな罪の下にあり、律法の行いでは義人は一人も無いと言う。しかし、神は信ずる者に

「いさお功なくして神の恩恵めぐみにより、キリスト・イエスにある贖罪あがなによりて」

義とせらるる路みちを開いてくださった。私達異邦人も、神の御意みこころに適った生活とは到底言えず、救いを要するが、信ずる者に救いを得させるキリストの御業みわざによって、恵みによる義を頂くことが出来る。

また、奥田先生は、以下のような図を書かれ、私達の立ち位置も説明してくださった。

アブラハム — 「モーセ」 — 律法 — (割礼) — ユダヤ教徒

←
↓ 「異邦人キリスト者」 ↓ 改宗したユダヤ教徒
←

「異邦人(未信者)」

加えて、アブラハムに直結する「裔」としてのキリストが大切(ガラテヤ3・16)。

最後に奥田先生は次のように話された。

「主の御意に適う積極的な生き方をするには、十字架の贖罪を受け取るだけでは、まだ半分です。その魂に聖霊が宿ることです(ヨハネ伝14～16章)。この聖霊がその人の生涯を通じて信仰を貫く原動力になります。」

集会後、食事も、総会を行い、明日から始まる京都キリスト召団別館改修工事にあたって現場の確認を行った後、「2013年降誕節集会の案内」の郵送作業を行った。



アブラハムの信仰

2013年12月15日

聖書朗読 ロマ書4章5～25節

今日は、来週のクリスマス特別集会を前にした祈りの集会が持たれました。先生は、ロマ書を主題とされましたが、随所に特別集会で話される内容の一端を示され、当日はさらに深く展開されることが予想されて楽しみです。多くの方の御来会をお待ちしています。講筵の一部をお伝えします。

人生には、自己を確立する第一段階、天職に携わる修業時代の第二段階、この世の仕事から解放されて神のために働く第三段階があります。これらの段階を経て到達する究極の目標は、キリストの似姿になることです。具体的には、一人一人がキリストの出店として働くこと、キリストの生命を、悩める人、道に迷った人などに分かち与えることです。神様は、我々の全生涯が神様の栄光の顕れとなること、肯定的人生となることを願っております。

ロマ書において「福音」とは、「御子キリストに関する全て」を意味します。その核心は、人を救い上げること、神の義と愛が貫かれていることです。

キリストは、ご自分の義を不義なる我ら罪人^{つみびと}に与え、我らの不義に対する神の裁きを一身に引き受けてくださいました。その姿が、徹底的に神様に従われたゲッセマネの祈りです（マタイ26章39節）。

アブラハムの信仰も、長子イサクまでも神様に捧げるといふ信の貫きにありました。神様は、それを義とされてアブラハムを祝福されました。我々は、キリストの十字架の贖いを全存在で受け取るにより聖霊（御霊）をいただくと、聖霊（御霊）が護り、導き、信仰の生涯を全うさせていただきます。

